すろーライフ

Slow Life

ＪＡ上川中央広報誌コラム

2012 ～ 2015

目　　次

1. お米の話～古古古米 －２－
2. わらべ地蔵～被災地の位牌 －２－
3. 車椅子レース～ロンドンパラリンピック －３－
4. ｉｐｓ細胞～ノーベル生理学医学賞 －４－
5. 未完の贈り物～逞しく育つ －５－
6. 年の最初～元日と元旦 －６－
7. お灸がツライ～赤穂浪士 －７－
8. 展望台から遥か望む復興の町～スカイツリー －８－
9. ホワイトアウト～父が娘を救う －９－
10. 自然保護と鳥獣害～北の無人駅 －10－
11. 冥土めぐり～一日でも長く生きてみよう －11－
12. 桂米團治～辿り着いた境地 －12－
13. ひまわり畑～悲しい群生 －13－
14. スーダン生まれ～全盲が見た日本 －14－
15. 近くて遠いユジノサハリンスク －15－
16. 竹林はるか遠く～平和の象徴 －16－
17. 東北球団の栄冠～ 3.11 の記憶 －17－
18. ペコロスの母に会いに行く～禿げ頭の息子 －18－
19. 野のななのか～心の中まで過疎に・・・ －19－
20. SOCHI オリンピック～小さな巨人の孤独 －20－
21. ムシ　ヤシナイ～オレ、父親を殺すかも・・・ －21－
22. 心通じ合う～室蘭市本町１丁目 46 番地 －22－
23. 田野畑村の鵜の巣断崖～記録文学の旗手 －23－
24. 息子には学問を～野口英世 －24－
25. 日中の海を越えた愛～恵恵の乳癌 －25－
26. 死ぬ前にもう一度、娘に会いたい～めぐみちゃん －26－
27. 四島の架け橋～納沙布岬 －27－
28. この町に祭りを～ 28 年の歳月 －28－
29. 大家の知恵は夢～落語人情話「芝浜」 －29－
30. ３頭の牛の入学式～夢は牛のお医者さん －30－
31. あなたに褒められたくて～高倉健 －31－
32. 攻めのもてなし～敏腕コンシェルジュ －32－

1　お米の話～古古古米

順調な生育を願う稲田の米に纏わる話です。

秋に堪能する新米の味覚。薪を使った竈で炊いたものを食味したくなる絶品である。十月のはじめあたりに店頭に並んだ時から、新米の称号が与えられる。炊き上がった時の湯気でさえ絶品に思えてくる。しかし、年を越えてからの呼称は二十四年産と変化する。そうして備蓄されていた米の呼び名は次の新米が出回る頃には、古米に変わることになる。新米・新米ともてはやされた割には淋しい呼び名である。古古古米と呼べば哀れささえ覚える。せめて、生産履歴が明確に管理されている現代においては、〇〇年度産・●●年度産で留めておいて欲しいものである。

社会へ新しく踏み出した者や、新しい職域で間もない人などを指して、新米ということばがある。と言って、熟練者を古米とは言わない。日本語の面白さでもある。調べてみると、此の時の新米は「新前」が変化したものである。経験未熟という意味で新米を使うことは、絶妙な味覚の新米に失礼なような気がする。因みに職人肌の人を玄人と呼ぶが、これも玄米に由来するとは考え過ぎであろうか。

穏やかな天候に恵まれますように。

JA 上川中央広報誌 H24.08 号掲載

2　わらべ地蔵～被災地の位牌

京都在住の一人の仏師が取り組む「わらべ地蔵」作成講習会についての新聞記事がある。東日本大震災でかけがえのない親族を亡くされた方々へ、彼の考え方に賛同した人々が集い、一日がかりで地蔵を彫り、それを届けるという運動の記事である。最初は位牌を彫って送ろうと考え、彼は宮城県の僧侶に相談した。「それはまだ早い。こっちへ来て見ろ 」。

急いで彼は、僧侶のいう東北の被災地へ旅をした。瓦礫の山はもちろんのこと、多くの尋ね人の張り紙が目に飛込んで来た。彼は、相談を持ち掛けた僧侶の言葉の意味を理解した。突然に、愛する親・子・兄弟などを失った状況では、人々はその事実を、到底受け容れられない。人々は、看護を続けたりした日々などを胸に秘め、時間の流れの中で、ようやく死という事実を受入れるものなのだろう。そのことを思い知らされた仏師は、一般の方達と「わらべ地蔵彫り」の運動を全国に展開し始めた。一生懸命彫った地蔵の顔が愛おしく、手元に置きたくなる人もいるそうだ。そこまで気持ちがこもってこそ、かけがえのない贈り物となり得るのだろう。心と一緒に実り多い田畑風景を奪われた町を思う。

JA 上川中央広報誌 H24.09 号掲載

３　車椅子レース～ﾛﾝﾄﾞﾝﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸ

車椅子 T52 レースの伊藤智也選手が銀メダルに輝きました。

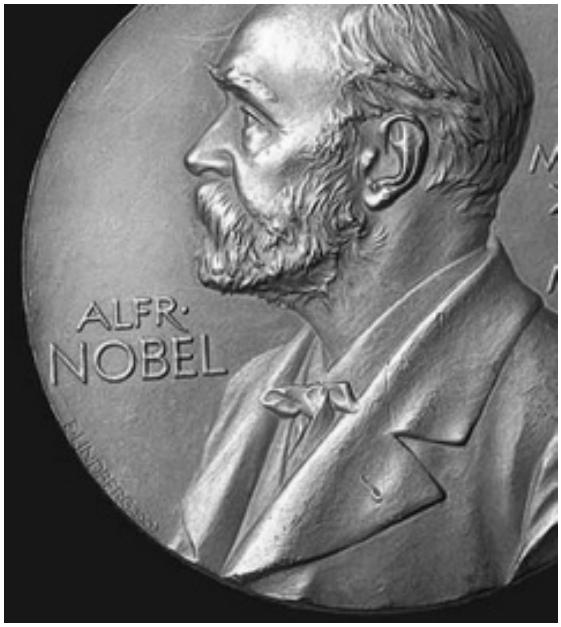
ロンドンパラリンピックでの競技結果である。レースに使用される車椅子は、私達が日頃お目にかかるものとは大いに異なる。下半身がすっぽり納まる車体を、三輪で支える形で、後の二輪を両手で廻すのである。彼は３５歳で多発性硬化症に襲われ、余命３年の宣告を受ける。同じ病名で亡くなった友人の無念さを晴らさんがため、彼は車椅子レースに挑んで行った。彼の父もロードでの練習などを補佐した。病の進行と闘いながら、生来の明るさと負けん気が競技能力の底上げをした。アテネ大会では、車椅子転倒を味わい、長距離走での入賞はならなかった。

パラリンピックも４年越しである。次の北京大会で、彼は短距離車椅子 T52　四百米走そして八百米走で２冠を達成した。今示した大会出場は、元気であったからこそ成しえたものである。又日々練習を積み上げたからこそである。そうして彼が、弱気にならなかったからである。今回ロンドンへ出発する前に彼は入院し、行くべきか行かざるべきかの選択を迫られた。結果は、ロンドンのグラウンドに彼はいた。そして決勝に進んだ。手首に激痛が走った。それでも無感覚の手で後輪を激しく廻した。輝く銀メダルを手にした。

彼は言う、夜が嫌いだと。それは明日の朝も同じ体であると言う保証がないからだ。私達は、このあたり前の幸福を忘れている。

JA 上川中央広報誌 H24.10 号掲載

４　ｉｐｓ細胞～ノーベル生理学医学賞



10 月に入って嬉しいニュースが届けられた。２０１２年ノーベル生理学・医学賞は再生治療に道を開く業績として、京都大学教授の山中伸弥ｉｐｓ細胞研究所長ら２名に贈られることとなった。日本国民にとっては、久し振ぶりに味わう喜ばしい出来事である。

難病を抱える患者からは、喝采の声が上がった。また受賞決定後の記者会見でその人となりが紹介されて来ると、親しみすら感じるようになって来た。学生時代にラクビー部に属し、生傷と度々の骨折を味わった。その時の経験が、彼を整形外科医の道へと進ませた。

しかし、実社会では挫折が待っていた。手術の技量が他の医師と比較して、余りにも稚拙だった。彼はそこでアメリカへ渡り、研究者の道へと、人生の針路の舵を切り直した。

その後、彼の２０年の苦悩と弛まぬ努力が、ひとつの真実を突き止めた。「明確なビジョンとハードワーク」彼の座右の銘である。スポーツマンの彼は野球の世界やマラソンの世界を引合いに、研究者の世界を紹介してくれた。「１割バッターでも大成功。９回失敗しないと１回の成功はやって来ない」何万何千回の挑戦があったのだろう。長い研究生活を送った彼の言葉であるため、ずっしりと重い。更に特筆すべきは、周りの人々への感謝の気持ちの言葉にある。

家庭を職場を、そして同僚・後輩を優しく思い遣る姿が浮かぶ様であった。どこをどうやっても接点のない、異分野での快挙ではある。しかし一部だけでも参考にしたい、そう思わせる、魅力溢れた若き研究者である。

ｉｐｓ細胞研究分野への寄付を訴えて、京都フルマラソンに挑戦したことも紹介された。愚痴ることは、何の結果ももたらさないことを悟り、果敢に挑戦し続けた研究者は、彼を慕う大勢の力の応援を享けて、オアシスに辿り着いた。農業分野では法人化が加速する。リーダーがビジョンを掲げることは当然であるが、わが身を呈してどのように立振る舞うかが、組織として問われるのであろう。それは小さな単位の集団でも、等しく通じる摂理であろう。私たちは誰でも、誰彼の有形無形の愛情を享けて、日々の仕事に臨んでいる。ひとは時折、あたかも一人で、事を達成したかのように錯覚するが。

JA 上川中央広報誌 H24.11 号掲載

５　未完の贈り物～逞しく育つ

２０１１年３月１１日この日は日本にとって忘れることの出来ない、日付になるであろう。東北沿岸を襲った地震と津波による人・地域・産業の喪失については、ここに示すまでもない大規模なものであった。それに加えて福島原発による被害・恐怖も、多くが語り多くがその是非を論じてはいるが、抜本的安堵感は伝わっては来ない。

ところで、今年の６月発行の単行本に目が留まり、すぐに購入しては夢中で読破した。米国在住、倉本美香著「未完の贈り物」がそれである。１０年間国際線客室乗務員として働いた彼女の、長女の出産から８歳の誕生日までの、苦悩のドラマである。何故、彼女がこの本を執筆しようとしたかは、最終「２０１１年３月１１日再生」の章に語られている。

彼女の長女の誕生日は３月１１日である。
彼女は目と鼻がない状態で、この世に生を受けた。妊娠中の胎児検診等では太鼓判を押してくれた日系産婦人科医師。しかし、出産が終わると、「出産おめでとう」の言葉もかけるでもなく病室から逃げるように消えていった。著者は、その産婦人科医との長い医療裁判の流れと、長女の繰り返された手術記録を時系列的に、渾身の思いで書き綴っていく。

異郷での出産、思いもよらない障害をもった子の誕生。彼女の心を、この世の不幸を一人で背負わされたような気持ちが支配していた。

当然、高額な医療費負担の工面の苦労もあった。そして娘の手術を、安心して委ねることが出来る病院への移動も、重労働であった。

この苦悩の日々を送っている彼女のもとへも、２０１１年３月１１日のニュースが、遥か祖国から届いた。彼女はその時、長女を含めて４人の子の母親になっていた。

日本の東北地方の事故の全容が見えてきた。当然、不幸を畳み掛けるような「原発事故」のニュースも伝わって来た。そんな中、彼女は「原発事故」の影響が論じられる時に、何度か話題となる言葉が気になった。「今回の事故で漏洩した放射能はごく微量であって、ニューヨーク、東京間を往復する乗務員の方がはるかに多くの放射能を浴びている」というものだった。著者倉本は、長女が逞しく育っている姿を見るにつけ、この子は原発の恐ろしさを伝える役割を持って、生まれて来たのではと思うようになったと、結んでいる。

３月１１日には、このようなドラマもあった。

東北は、白い雪の降り積む長い冬である。

JA 上川中央広報誌 H24.12 号掲載

6　年の最初～元日と元旦

元日と元旦では意味合いが異なる。年の最初の日が元日である。その元日の朝を元旦と呼び、または初日の出のことを指す。そう言えば人の名前で、「元」をはじめと読む場合は多い。名付け親は「元旦」の愛でたさを子に託したのであろう。「旦」という文字の発想が素晴らしい。地平線より顔を出した朝日を表すなどと説明を受けると、すっかり頷いてしまう。

日本のみならず、元日を祝日にしている国は多い。しかし、日本のお正月の雰囲気は格別のものがあった。その昔、お正月遊びでは、凧あげや独楽廻し・羽根つきと多彩であった。日頃小遣いに縁遠い子供たちには、お年玉があたった。このお年玉の語源もおもしろい。

古くは正月行事として「歳神」を迎える祭りがあり、門松を立てて鏡餅を供えた。その供えた餅をお下がりとして子供達に食べさせ、「御歳魂（おとしだま）」と呼ばれたことに由来するという説である。こどもの一年の健康を願った行事であったのだろう。

現在は熨斗袋に、どの紙幣が何枚しのばせてあるかが子供達の楽しみである。

それにしても、子供達が外で元気に遊ぶ姿にお目にかからない。日頃から気には留めていることであるが、外でのお正月の遊びなども風化する運命なのだろうか。恐らく、手にしたお年玉を持って、ゲーム機・携帯ショップへ勇んで走るのだろう。

家庭のお正月風景も簡素化され、一家団欒の遊びなども縁遠いものとなってしまった。

ところで「お正月」の唱歌を口ずさんでみると、何故か昔の幼年期の、清楚な正月風景が蘇える。それでいて非常に温かい。

現代は、あまりにも物質に恵まれた時代だと言わずにはおられない。年越し蕎麦を腹に入れ一年を振返り、元日の朝の雑煮に新箸を入れ、気分をあらたにする。これだけでも幸福感を抱く。毎年こうして暮れて行き、こうして元旦の陽を拝む。すべての人の営みがこの連鎖である。どんなに時代が流れても、人々を穏やかな風で包んでくれる、お正月の原風景だけは変わらないで欲しい。

テレビに映し出される、初参りの雑踏風景や日本髪を結って歩く女性達の姿が、ひとときお正月気分を増幅してくれる。

燗地酒微睡み（まどろみ）夢は富士に茄子。

JA 上川中央広報誌 H25.01 号掲載

7　お灸がツライ～赤穂浪士

農協事業年度は、二月に始まり一月に閉じる。その始まりの二月にちなんだ話題をひとつ・・・

元禄十六年二月四日、赤穂浪士四十七士が切腹。主君浅野殿の無念を晴らさんがために、吉良上野介（こうずけのすけ）邸へ討入りし、仇を討ったことへの幕府の咎（とが）によるものであった。

この幕府の幕引きに纏わる劇は多い。江戸後期、現在の浜松町増上寺門前の長屋へ、天秤棒を担いで豆腐屋七平衛が入ってきた。すると、蚊の鳴く声で豆腐を求める若者が居た。豆腐を手にして、代金は明日払うと言う。

次の日もその長屋前を通ると、若者は豆腐を求めてガツガツと食べて「今はお金がない」と言う。事情を尋ねると、志を抱いて学問をしていると言う。豆腐屋七平衛は、青い顔をして、食事も碌にとらずに学問に打ち込む若者に心が動いた。「出世払い」を条件に次の日から、味付けおからや、女房の心尽くしの握り飯の差入れが始まった。

ある日、豆腐屋七平衛は風邪をこじらせて商いに出られなくなった。何とか回復して天秤棒を担いで増上寺門前の長屋へ行くと、若者の姿はなく、もぬけの殻で、行く先も分らなかった。縁がなくなって次第に夫婦の頭から若者のことが消えていった。長屋で聞いた若者の名前「お灸がツライ」だけが残っていた。

時は流れ、元禄十五年十二月十五日、赤穂浪士の吉良邸討入りの翌日夜半に、豆腐屋の隣りあたりから出火し、あっという間に一面が全焼してしまった。七平衛夫婦も体ひとつで知り合い宅に身を潜めていた。見知らぬ人から、当座の資金にと見舞金が届けられた。

そして二月、赤穂浪士切腹から間もない頃、知合いの大工が尋ねて来て、芝増上寺門前の焼け跡へ行ってみると、真新しい豆腐屋が建っている。実は、見舞金を届けたのも、新築した豆腐屋を七平衛夫婦へ贈ったのも「お灸がツライ」その人物だった。

彼こそが、儒教学者として柳沢吉安に仕え、数々の箴言を申した荻生徂徠（おぎゅうそらい）、その人であった。夫婦から受けた情けに対する、芳情が貫かれていた。そしてその徂徠こそが、幕府へ赤穂浪士切腹を言上したのである。主君への義を通した片方で、天下の大法を犯した四十七士への情けが、切腹だったのである。打ち首や獄門などの極刑を免れ、武士道を最後の花道として情けを受けた、四十七士の散り際は、清清しいものであったという。

更に付け加えれば、この豆腐屋の繁盛は言うまでもない。二月の風はまだ痛い。

JA 上川中央広報誌 H25.02 号掲載

8　展望台から遥か望む復興の町～ｽｶｲﾂﾘｰ

夜遅い便の飛行機で東京へ出かけた。羽田から品川の宿に急いだ。道すがら、気になる今を追ってみた。都内の夜の電車では、大方の乗客は同じ指の動きでスマホを操っている。その昔、Ａ３サイズの夕刊を読む人が多く、読み終えた汚い夕刊が荷棚に並んでいた。

家路までの長い時間の退屈さを和ませるものが、取って代わってしまった。目的地の駅の改札口を通過する。キップの場合はごく僅かで、ＰＡＳＵＭＯなるカードを照らして進んでゆく。オムロンの製品名で一躍、時代の寵児となった立石電機㈱が世に出した無人改札機群である。キップが主流の時代から、今はキップであろうとカードであろうと飲込んで、人にスムーズな流れを提供している。

この無人改札機の登場秘話はおもしろい。飲込んでしまって、キップが出て来なかったらどうしようと言う、不安心理が働いて普及まで多くの時間を要したとあった。その技術は、自動交差点システムや現金自動支払機などへ受継がれて行った。高速道路のＥＴＣカードによる決済も、今では当たり前になっている。出入口バーの開閉が自在である利便さ。

翌日、空時間を利用して品川駅から押上駅へ出掛けた。スカイツリーへの最寄りの駅である。朝九時からの行動であったが、入場券を購入するのに長蛇の列である。まだ、この群衆を機械的に処理することは出来てはいない。誰も列を乱すことなく、不平を発する訳でもなく整然と並んで進んで行く。入場券売場も機械的ではなく、女性が対面し、窓口で手渡ししてくれる。ようやく数台あるエレベーター入り口に到着。大きな人のブロックを乗せて三百四十五ｍの展望台へ。殊のほか早い移動である。大パノラマに歓声が上がる広場。あの東京タワーを眼下に見る、ここでも時代が変わったことを実感する。

各種の先端技術を結集して、大勢の観覧者を唸らせるタワーがあるかと思えば、少量の雪でも交通麻痺を引き起こすのが都市である。展望台から望む峰峰の遥かかなた、そこにはまだ、もとの故郷には程遠い、復興を待ち望む町街がある。

文明の発達を受容れるということは、利便と悲劇が同居するということを、覚悟しなければならないのだろうか。そうなのだろうか。

JA 上川中央広報誌 H25.03 号掲載

９　ホワイトアウト～父が娘を救う

殊の外、雪の多い低温期間が長い年である。

この３月２日オホーツク沿岸地域に暴風雪警報が出て、予告通り大荒れの天候になった。翌朝の新聞には悲しいニュースの大見出しがあった。ホワイトアウトが９名の人名奪う。

地吹雪の猛威は、大きな雪溜りをつくり車を丸飲みし、車中の人々を閉じこめた。やっとの思いで車から脱出した人、地吹雪の中を歩いた人。登山などでガスがかかり、目の前が真っ白になり、何も見えない状態を意味するホワイトアウトの中で、人の判断が運命を分けた。３月になっても続く、外気の低温も悲劇を大きくした。

車中で暖をとるためのエアコンの排ガスが、雪に逃げ場を失い、車中に流れ込んでの悲劇もあった。命を落とした父親は、旅の途中などではない。すぐ近くの友人宅を訪ねただけであった。

娘とふたり車を降り、地吹雪の中を少し歩き、見覚えのある納屋に身を屈めた。父親は娘を包むようにして、風から守った。翌朝発見された父親は冷たくなっていた。

その父親の体温は、幼い娘の命を救った。南国育ちの人々には恐らく理解されない、北国の恐怖の１日になった。母親とも死別しているこの小さな女の子のもとには、死んで娘を救った父親を称える手紙や、これからの人生への激励の言葉が後を絶たないと地元の新聞は伝えている。

「たら」「れば」は人の世の常である。気象条件の急激な変化や車の悪路運転などへの対応で、人はワンテンポ遅れがちである。今手掛けていることを済ませてからと思ったり、これ位は大丈夫だと、自分で勝手に暗示したりと、後悔される結果には伏線があるものだ。

この後も３月１０日には、道央・太平洋岸地方を再び暴風雪が猛威を振るった。自然の怒りにも似た風雪を耐えるだけである。

しかし、吹く風も次第に肌に柔らかくなるものだ。季節を違わず２ヶ月も経ったら、あの湧別の色とりどりのチュウリップも花を咲かせるであろう。そして、公園には大勢の人々の歓声が飛交うであろう。オホーツクの浜風を肌で感じたら、この冬の荒れ狂った暴風雪の１日を思い出して欲しい。

JA 上川中央広報誌 H25.04 号掲載

10　自然保護と鳥獣害～北の無人駅

渡辺一史著「北の無人駅」を読んでいる。

道内にある、今は無人駅と化した、気になる駅の歴史などを書き綴っている。その中で茅沼駅に纏わる編は、いろいろ考えさせられる。茅沼駅は釧路と網走を結ぶ釧網本線の釧路寄りの無人駅である。タンチョウの飛来地で有名な鶴居村と眼と鼻の先である。

長い、人々の給餌の歴史が、そのままタンチョウの生息地としての知名度をあげる原動力になった。昭和 27 年観測時には僅か 33 羽であったタンチョウは、平成 18 年には１０８１羽を数えるまでになったとある。釧路湿原界隈で、その大きな羽根を広げ悠々と空を泳ぎ、その湿原に降りては春には営巣する。

平和な空間が歴代の駅長や、心優しい住民の手によって受け継がれて来たのだ。しかし、現場にいざ足を踏み込むと、そこには自然保護観や観光手法などにまたがる諸問題が潜んでいる。

釧路湿原なればこそ、タンチョウ繁殖増加を可能にした土壌があったのだ。耕作田を抱える地方では、作物あらしなどの問題が湧き上ったり農薬散布の実情があり、タンチョウ群生地としては成立しない。トキ・コウノトリの歴史がそれを実証している。自然保護とは背中合わせで、近年エゾシカが異常繁殖を続けている。温暖化の影響もあり市街地にも顔を出す。観光客は大きなエゾシカに出会っては、歓声を上げる。

明治期北海道の森林には、開拓の鍬が入った時期、エゾオオカミが君臨していた。

入植時、同時に畜産業の芽生えがあった。それを見て取っての開拓使の指導は、牛馬を狙うエゾオオカミ撲滅であった。明治 22 年 38 頭捕獲したという記録を最後に、エゾオオカミの姿を見ることがなかったと言う。それは北海道だけの問題ではなく、東北地方の馬産地などでも、日本オオカミ駆逐・撲滅の歴史がある。しかし、このオオカミが生態系の頂点としてシカ・イノシシ・猿などの野生動物を捕食していたと言う。かくて、広大な自然界の摂理は壊れ、間引かれて共存するという循環は停止してしまった。人による猟での間引きに依存するだけである。

我が物顔で市街地を飛び跳ねるエゾシカを、観光客のシャッターが追う。自然保護と鳥獣害の目線が噛合わない。異常繁殖した鳥獣が里で引起す「悪さ」だけが助長する。

JA 上川中央広報誌 H25.05 号掲載

11　冥土めぐり～一日でも長く生きてみよう

連休中の５月４日の朝刊。生活の欄の半ページに見覚えのある名前が飛込んで来た。

「鹿島田真希」かしまだまき、積んでいる本の背表紙を探した。すると、今年になって読んだ本の作者がそうであった。去年の第１４７回芥川賞受賞作という帯が付けられた「冥土めぐり」が対象作品であった。この本を手にした理由は、時には文芸作品を読んでみようと思っただけである。それにしても、題名が重いなあとの感想があった。しかし表紙の装丁は、１９世紀の画家ドガの「踊り子」を思わせるものであった。作品は、体の不自由な夫との生活や、母親と弟に纏わる話題が書き綴られた短編だった。私には少々気が滅入る作品であった。よもや、この芥川賞受賞作品が、実生活から生まれたものであるとは思いもしなかった。眼にした新聞の「介護の恵み・見守る人たち」の欄には詳しく、２人の出会いから日常の生活までが紹介されていた。車椅子に腰掛ける夫の膝に手をかけ、優しく微笑む彼女、ふたりの姿が大写しされていた。結婚から３年後、夫の体に変調が見え始めた。表情が乏しくなり、手や足の動きが鈍くなった。日本に１００人しかいない難病であった。知的な面では衰えはないが、体全体の麻痺が進んだ。夫は病気になっても、人に八つ当たりすることも、どうして不幸なのかと嘆くこともなかったとある。むしろ彼は、人生がこうなったら楽しいだろうといつも考えていた。

しかし、夫の体が不自由になってから、彼女の肩に家計の負担は重くのしかかった。ヘッドホーンをかけて作品を執筆し続けて、そのころの文学賞を総なめにしていた。

悲しいかな、その勢いは同時に、彼女に大きな不満を植え付けていたのだ。アルコールにおぼれた日々が続いた。約２ヶ月間、静養し意識が清明になったころ、「体は動かなくても、夫は知恵を出して私を助けてくれる頼りになる人だ」彼女は気付かされた。夫を主人公にした作品と向い合う力が生まれたのである。

１０回の推敲を経て、ここに芥川賞受賞作品「冥土めぐり」ができあがった。最後に彼女の夫の言葉「怒るということが、いかに愚かか。怒りは一過性で継続するものではない。そんな感情は持たないほうがいい 。」 肝に銘じて。

何か爽快な気持ちを朝刊からもらった。

JA 上川中央広報誌 H25.06 号掲載

12　桂米團治～辿り着いた境地

愛別でも上川でも、若い農業者が戻って来ている話を聞くと、頼もしい限りである。今回はある落語家の話である。寄り道をしながらも、話が後継者ばなしに繋がればと思っている。

桂米朝（べいちょう）は東西を問わず、現在の落語会の重鎮である。そして故柳家小さんに次いで二人目の人間国宝でもある。現在は車椅子の生活を余儀なくされ、高座姿にお目に掛かれることは先ずない。その子、もと桂小米朝（こべいちょう）が世の注目を浴びて桂米團治（よねだんじ）の大名跡を襲名したのは平成２０年のことである。全国を襲名披露で回って舞台をつとめた。或る時は米朝も口上の席についた。落語家は世襲制ではなく、あくまで弟子・師匠の関係から始まり、芸を極めて認知され、新しい師匠に育って行くのが一般的である。桂小米朝を名乗っていたときは、マクラで親の米朝の物まねをやって客を呼べた。演じながら、親子とはいったいどんなものなのか、その当時の桂小米朝は追い求めていたのかも知れない。はるか彼方の師匠桂米朝は、他の弟子の手前、贔屓心など抱けない。小米朝を弟子の一人として見守ったのである。

さて、襲名披露を終えての桂米團治の芸風は、華やかさを兼ね添えた重厚なものに浄化された。共演者もいない、誰も助けてくれないひとり舞台は、親の七光りを受けているようで受けられない厳しい世界だったのである。

他の弟子仲間との空気を読み取った、若き日の小米朝は「自分が実力をつける」その道しかない覚悟をもったのである。

親子について彼が書いた思い出がある。子供との師弟関係の難しさを感じた米朝は、鞄持ちの付き人である息子と二人きりになった。その時米朝はこう呟いたという。「今は師匠と呼ばなくてもいいがな」こう漏らした言葉を今も忘れないという。

追いつこうとの思いが強かった、若い日の米團治が、やっと辿り着いた境地とは、それぞれが別世界なのだ、というものであった。

JA 上川中央広報誌 H25.07 号掲載

13　ひまわり畑～悲しい群生

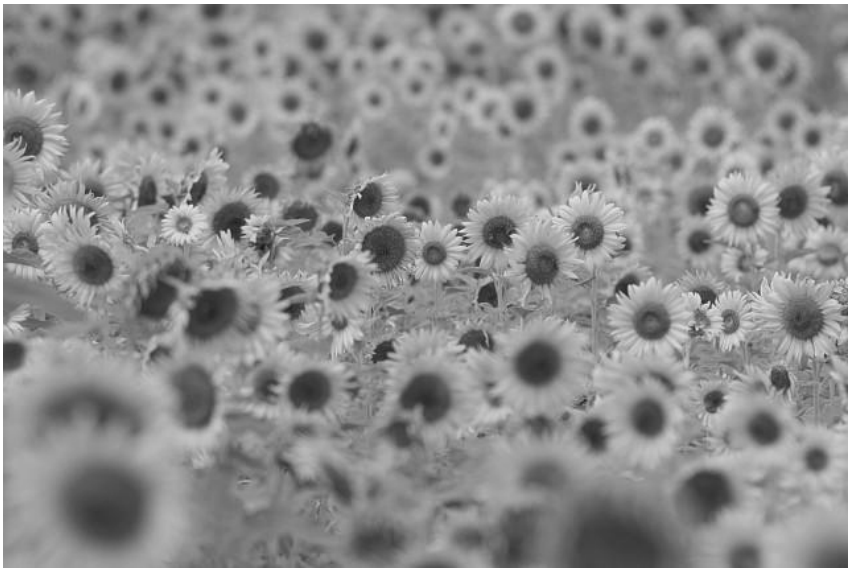
車のラジオから懐かしい映画音楽が流れて来た。結婚して間もない二人の姿を追って、その映画は始まる。イタリアの小さな村が舞台である。しかし、それは近く彼が、兵役に出向く前のひと時の喜びであることが分かる。

映画「ひまわり」である。４０年前の作品でもある。哀切のヘンリーマンシーニーの音楽が、観客の涙を誘った。出兵した彼は帰って来ない。時は流れる。送り込まれた部隊で一緒だった元兵士に出会う。わずかな手掛かりを持って、愛する夫の生存を願い、ソ連へと旅立つ。言葉も通じない異国で、諦めることなく夫を探し続けるうちに、一軒の家を紹介される。しかし、そこには夫の新しい家庭が出来上がっていた。

言葉が通じなくとも、事情を理解した相手の女性は、田舎の小さな駅へ彼女を案内する。列車から次々降りる労働者の中に、探しあぐねた愛しい夫の姿。しかし、彼女は運命を悟ったかのように、出発しようとしている列車に飛び乗った。見知らぬソ連の村を訪ねた、彼女の心情と重なるように、風に揺らぐ地平線まで続くひまわり畑。随所に大映し出されるのである。燃えるような強烈な黄金色のひまわりが、見事にうら悲しい心情を演出したのである。雪原に倒れ、優しいソ連女性に救われた彼は、記憶喪失気味だった。

しかし、彼は列車から降りた時見かけた女性が、愛しい祖国に残した妻であることを、ゆっくり思い出した。出兵の時に別れた駅に、彼女との昔の生活を取り戻したいとする彼がいた。この時の舞台は、イタリアを代表する荘厳重厚なミラノ駅である。長い時間をかけて探した夫が、ソ連からやって来たのだ。揺れ動く心の彼女は、ソ連にいる夫の子供に、人形の贈り物を託し、夫と永久の別れをミラノ駅で迎えるのだ。

戦争が生んだ悲劇は多い。日本でも、映画と同様な過去があった。ひまわりは向日葵の漢字を当てて、まわりを明るくする花ではあるが、映画では見事に悲しい群生として活かされた。因みに映画での壮大なひまわり畑は、スペインで撮影されたものであった。当時の社会情勢では、ソ連には外部との壁があり、芸術といえども許可が下りず、冷戦状態を浮彫りにした格好となった。



季節はまさに向日葵が一番似合う夏本番。

JA 上川中央広報誌 H25.08 号掲載

14　スーダン生まれ～全盲が見た日本

マハメド・オマル・アブディンはアフリカスーダン生まれの留学生である。日本での生活も長くなり、舌を巻くような巧みな日本語で、１冊の本を出版した。

弱視から全盲になりかかった頃、故郷スーダンで見つけた日本への留学生募集に応募して、難関を突破して来日していたのである。

故郷で日本語専攻の土壌などなく、ただただ未知の国・日本を目指したのである。その留学の本来の趣旨は、外国人への鍼灸の専門知識養成と、国家資格取得であった。

祖国スーダンの親を納得させ、青年はひとり不安を胸に成田空港に降り立った。

「わが盲想」の本のタイトルから分かるように、ウィットに富んだ日本語を操るまでに、彼は成長した。しかし、目が不自由で日本語にも馴染まず来日した青年の苦悩は計り知れないものだった。スーダンの公用語はアラビア語である。英語能力もそれなりしかない。

日本語の未熟さや、鍼灸専門用語のちんぷんかん加減から想像された一回目の不合格。故国への帰還かと思った処へ、優しい助け舟が現われた。日本海の福井市にある盲学校への入学許可が下りたのだ。

日本国内の試験を受けるにあたっての日本語力の向上、それを土台にした点字解読能力の取得。かれは雪国に因んで、「雪の上にも三年」と後に振り返るほど、机に向かった。

教師が粘土に書いた漢字を、毎日手でなぞった。漢字の組み立て方を理解し始めた。専門用語の意味が、少しずつ溶け込んで来た。そうして自信が膨らんできた。卒業時に受けた鍼灸国家試験、彼はその扉を自分の力でこじ開けた。彼はここで留まらなかった。

音声ソフトを組み込んだパソコン技術の取得へもダッシュした。その意気込みは更に進化し、故郷スーダンを考える「アフリカ地域研究」の大学ゼミに参加し、現在はその大学院で研究を続けている。

その傍ら「スーダン障害者教育支援の会」を立ち上げ、故国の若者をサポートしている。

スーダンでは親戚同士での結婚は一般的で、子供が障害をもって生まれる可能性が、日本よりも高いという。彼が見えない目で見た、日本の風土をどう祖国に生かすか、すごい彼ならこそ、興味津々である。

JA 上川中央広報誌 H25.09 号掲載

15　近くて遠いユジノサハリンスク

稚内に宿を取り、翌日のユジノサハリンスク行きフェリーに備えた。当日の朝食を終えると、何やら慌ただしくなっていた。暴風警報で、フェリー欠航となった。その判断が間違いではないことは次第に理解されてきた。稚内の町にも強い風が吹き荒れた。

しかし、そんな出来事はなかったかのように、翌朝は凪の平和な海があった。５時間半の船旅である。稚内港を離れてコルサコフ（旧大泊）港へフェリーは着岸した。コルサコフは旧都市の表現が似合う、どこか寂しい港だった。下船して事務所まで乗ったバスの排気音、長い入国審査の待ち時間、好印象を抱くには程遠いものであった。樺太として長きに亘った日本の歴史は、消えてしまっていた。入国審査を終え、迎えのバスで、ユジノサハリンスク（旧豊原）の宿を目指した。コルサコフの海岸線には、漁師の集落と思しき家々が点在した。アップダウンの激しい道路を１時間ほど走った。中心部へ近づくと、街の規模が次第に大きくなる。道路幅も広くなり、骨を休める宿にようやく辿り着いた。丸１日を費やしたユジノサハリンスクへの行程であった。遅いディナーで初めてロシアン料理を口にしたが、意外と親しみやすいものであった。それは、その後のどの料理でも抱いた感想である。ウクライナ地方、また〇〇地方の家庭料理と味わったが、私の胃袋には量が多かった。しかし、コース料理で登場するスープは絶品である。豆をベースにしたもの、馬鈴薯をベースにしたもの、トマトをベースにしたもの、ゆっくりとたしなみたい一品であった。

翌朝から、宗谷線沿いの各市が持ち寄った農産物・加工品を販売する「道北物産展」が始まった。悲しいかな、我が町の出品はできなかった。会場のショッピングモールは、開始前から盛り上がり、スイカ・メロンそして野菜のブースに人の列が出来上ってしまった。「オープニングセレモニーが終わってからだ」とロシア語で注意しても、無駄だっただろう。正面玄関で行われたセレモニーにも、大きな人の垣根が出来上がった。交流を祝う北海道とサハリンの代表がマイクを握った。薦被（こもかぶ）りの日本酒が振る舞われた。ショッピングモールの１階と３階が日本色で彩られた。さあこれが、強い絆へと発展していけるのかは、今後のとらえ方で決まるのであろう。最短で４５キロの稚内とサハリン突端・旧能登呂岬を結ぶ航路はない。湾岸を大きく蛇行してコルサコフの港へ向うルートなのだ。スーパーを覗けば世界各地からの物流に、驚かされる。物産展を覗いた人々は、日本の安全を求めて、また健康志向の商品を求めて並ぶのが、手に取るように分かる。消費が拡大する都市である。しかし、政治体制も文化も異なる、近くて遠い隣国でもあるのだ。歴史を再確認する目的で、改めて巨大なレーニン像が駅前広場に建てられている。
朝明けが遅く、霧が立ち込める通りをホテルの窓辺から眺めて、大きなため息をついた。

JA 上川中央広報誌 H25.10 号掲載

16　竹林はるか遠く～平和の象徴

ヨーコ．カワシマ．ワトキンス著「竹林はるか遠く」は、アメリカで刊行され２０年を経た今、ようやく日本語に翻訳され書店の棚に並べられた。アメリカの中学校の教材としても採択された、終戦時にはまだ幼かった著者の体験秘話である。朝鮮半島北端の町「羅南」に住んでいた家族は、終戦に乗じて南下したロシア軍を逃れ、混乱の朝鮮半島の中央部の山野を歩いた。父親はシベリア、兄は軍需工場と離れ離れになりながら、母と姉、著者の女性３人の逃避行を、生々しいタッチで描写している。著者は当時７歳であった。

「羅南」の自宅の庭の竹林は、家族の平和な生活の象徴であったが、すぐそこまで危険は迫って来ていた。取るものも取りあえず、やっとの思いで、負傷者を運ぶ赤十字貨物列車に飛び乗ることができた。リュックの中は間に合わせの物だけだ。風の中を走る貨物列車で見た光景は、著者のその後の人生観に大きな影響を与えた。

乳房を口にあてても、それを吸うこともなく泣くこともなく果てていった幼子。その子を処置して、列車から投げる衛生兵。その後を追って身を投げる親。著者は自分の眼の前で展開する地獄絵を、淡々と綴っていく。

先頭車両２輌が空爆を受け、九死に一生で脱出する。それからは、置き手紙で兄との待合場所とした京城の駅を目指して、３人だけの長い逃避行が続いた。やっと辿り着いた京城駅で、母は何日も息子を待った。しかし、情勢の更なる悪化を読み取った母は、木材移送の貨物列車で釜山まで行くことを決断した。

そして多くの幸運にも恵まれ、何日も待たされはしたが、釜山港で貨物船に乗込み、懐かしい日本の地を３人は踏みしめた。このドラマは日本への帰還で終わりではなかった。

終戦直後の博多の港へ上陸して、姉妹だけになった境遇の中で、いかに逞（たくま）しく強く生きたかを語っている。愛しい母親は、待ちに待った祖国の土を踏んだが、日本での移動・実家の喪失、そうして大陸での辛苦からか、居を構えようとした京都の駅で息絶える。

姉妹のその後の生活ぶりも、何も臆することなく、見事に綴られている。著者は名前で分かるように、大陸と日本で手にした強靭な生命力を宝に、通訳者となってアメリカに渡り、幸せな家庭を築いている。

戦争を知らない世代の層が広がって行く今、お薦めしたい一冊である。

JA 上川中央広報誌 H25.11 号掲載

17　東北球団の栄冠～3.11の記憶

東北縦貫道一関ジャンクションから一般道を走り、その昔難工事であったという水界（みずさかい）峠を越えた。それまで見て来た穏やかな夏の田園風景が、峠を境に目を疑うような光景へと切り替わった。宮城県本吉郡南三陸町志津川の被災地に辿り着いたのだ。

これまで画像などで、何度もお目にかかった風景であった。東北の稲の具合を見る研修の旅で立ち寄ったのである。陸前海岸を臨んだ良港であったであろう港も、大津波で砕かれた堤防などの復旧が急がれる状況であった。

あの防災対策庁舎が、鉄骨が剥き出しになったままの状態で建っている。命果てるまで住民に避難を叫び続けた乙女の声が聞えて来るようだった。祭壇に手向けられた花束と線香の香が、３．１１の記憶を鮮やかなものとした。周りを見渡しても、まだ生活の匂いを感じない。宿への道の傍らには、曲がりくねった線路の一部が剥き出しになったままであった。夕刻の宿の露天風呂からは、静かな凪の湾内を漁船が２・３隻、そして遠くに志津川の町を望めた。次の日には東北道を戻って、仙台空港に程近い名取岩沼農協を訪ねた。

こちらも３．１１には、支店の損壊・職員の殉職等の傷を負った。この後勧められて訪ねた名取市閖上（ゆりあげ）地区でも呆然となった。ひとつの集落がすっぽりとなくなり、大津波が飲み込んでしまったその昔を、想像することは容易ではなかった。

太平洋を間近にした閖上地区は、一帯が野菜栽培の畑で、包み込むように農家が点在した。手付かずの農地には夏草だけが茂っていた。小高い丘には「閖上湊神社」が建立されていた。その祠の傍らには、自らも被災した地区の宮大工が、捜し求め回収した道具と木材をもとに執念で再興したことが綴られていた。さらに祠に２本立つ神木の間隔は、２尺５寸７分に納まり、このような災害が二度と来ないようにという願いが込められていた。

画像でしか知りえなかった東北の被災地の今は、復興と呼ぶにはおぞましい厳しい現実があった。東北に９年前に産声を上げた球団が、この秋に吼えた。紙吹雪の舞う中の胴上げシーンを見つめながら、この夏訪れた被災地の絵がだぶった。野球での頂点が奇跡を生むものではないが、奇跡に似た栄冠の喜びを、被災地の人々が共有したのは確かであろう。

間もなくこの１年が過ぎ去る。何年耐えればいいのか分からない町が有る。村がある。

JA 上川中央広報誌 H25.12 号掲載

18　ﾍﾟｺﾛｽの母に会いに行く～禿げ頭の息子

本来、大きな品種が主流であるが、野菜には小さいが故に珍重されるものがある。たとえば人参の小指大はミニキャロットまたはベビーキャロット（姫人参）の品名である。

茎に実をつける芽キャベツはフランス語でシュー・ド・ブリュッセルと呼ぶ。ベルギーの首都ブリュッセル近郊が原産地であり、それが名前の由来である。そうしてペコロス、小さい玉葱の呼名である。大正時代に輸入され、当時の西欧ではこう呼ばれていたらしい。別名ペティオニオンの商品名がある。

と言って、ミニ野菜の話題をとやかく、ではない。聞き慣れない「ペコロス」に因んだ映画を見たからである。「ペコロスの母に会いに行く」は著者の故郷、長崎で自費出版した本が口コミで話題となり、遂には映画化の運びになったのである。８９歳の認知症の母と彼女を支える６２歳の息子の物語である。

４コマ漫画を駆使して、ほのぼのと切なく愛情豊かな作品が出来上がったのである。

「ペコロス」は小さい玉葱のような主人公の禿げ頭の別名である。日に日にすすんでいく症状を見かねて、ホームへ入所させる決心をする。帰り際にはいつまでも、いつまでも見送る母親がいた。ただ少し、記憶の線が細くなっただけではないのだろうか。しかし、帽子を被ってホームを訪ねると、母親は知らない人だと怯えてしまう始末である。帽子をとって頭を撫でれば、母親は愛しい息子だと気付いてくれる。「ペコロス」の頭だ。

認知症の母親の頭の中には、昭和初期の幼少期から働いた、厳しい時代の記憶がそのまま残っている。結婚してからの苦い記憶も残っている。長崎に投下された原爆で亡くなった、妹の死も鮮やかに記憶されている。

毎日いがみ合った、夫との生活の日々も、鮮明に頭の中に生きている。ただ、過ぎ去ったものと今あるものの線引きが、あやふやになっただけであろう。ペコロスの息子は、そのことに気付き、長崎の「ランタン祭り」に母親を連れて出掛ける。中華街の祭りは最高潮に達していた。気が付けば、人混みの中で母親がいなくなっていた。四方八方を探して行くと、母親は恐らくその昔、姉妹で来たのであろう眼鏡橋に佇んでいた。

(C)2013「ペコロスの母に会いに行く」制作委員会

スープなどに浮かぶペコロスを見つけたら、今この瞬間にもいろいろな思いの人がいることを、思い浮かべて下さい。穏やかな１年であることを切に願いつつ。

JA 上川中央広報誌 H26.01 号掲載

19　野のななのか～心の中まで過疎に･･･

大林宣彦監督が芦別市にやって来た。 20 年来の約束を果たすためであった。 35 歳で命果てた者との約束であった。彼は、自分のふるさと芦別を舞台にした映画を夢見ていた。

行政マンとなった彼は、大林監督に芦別市の広報を送り続けた。そこに生きる人々の素晴らしさと優しい自然の恵みを伝えるために。

それは「芦別星の降る映画祭」の開催で序章を迎えた。しかし癌に侵された彼は、映画祭の数を重ねることなく亡くなった。彼は大林監督の映画が、監督の故郷倉敷への大きな愛に包まれたものであることを知っていた。

その想いを芦別にぶつけて欲しい、それが亡くなった彼が抱いていた夢だった。

「野のななのか」の台本を抱えて芦別市民の前に大林宣彦監督が帰って来た。四十九日法要に集った人々の人間模様が、芦別を舞台にして繰り広げられる設定である。

炭鉱の町として隆盛を誇った町も、エネルギー革命の荒波を受け衰退の一途をたどった。

ところで、志半ばで果てた彼には、忘れ形見の女の子がいた。今ではその彼女も立派に成長し、高校生となっていた。

大林宣彦監督も彼女との再会を楽しみにしていた。大勢のエキストラを必要とする映画作りの中へ、高校生となった彼女を登場させる筋書きが、監督の頭の中にはでき上がっていた。町中が映画作りでひとつになり、１億円とも言われる制作費へのカンパも、多額の寄付を集めた。セット製作のためには、町の工務店が動き出した。

賄いへの協力も市民が買って出た。「ガタタン」と呼ばれる芦別地域の家庭料理が振舞われた。大林監督の芦別への目線はぶれることなく、現在のカナディアンワールドも登場させ無言の叱責があった。

芦別を映画の舞台へ、との夢を抱いた彼は病に果てたが、その夢は見事に友人などへバトンタッチされていた。夢を見た人がいて、その夢を育てた人があり、その夢に応えた人がいた。そうして大林宣彦監督には、劇中で使いたい台詞があった。「町は過疎と化したが、心の中まで過疎になってはいない」この台詞を芦別の仲間から聞いていた大林監督は、それに相応しい舞台を模索していた。今、心臓に負担をかけられない体の監督は、長丁場のロケで何度も椅子に寝そべった。耐えられるのは、一人の青年との約束を果たすためだ。この映画は、この春に一般公開される。

JA 上川中央広報誌 H26.02 号掲載

20　SOCHIｵﾘﾝﾋﾟｯｸ～小さな巨人の孤独

２月 11 日の夜の１時を回った頃、上川町まで車で走った。会場前は報道陣の中継車や町民の車でごった返していた。今宵大型画面で上川町出身の 17 歳の女子ジャンパーを応援するのだ。彼女の直近の転戦の成績からも、最も輝くメダルを首に架けるであろうと、会場の全員が思っていたであろう。

報道陣のフラッシュが眩しく、華やいだ気を増幅していた。町の中心街には、薄桃色の彼女の名前の幟が何本も風に靡（なび）いていた。ＪＲ石北本線の上川駅も、彼女の名前で飾られていた。いや、地元だけではなく日本国中が、今日の彼女の輝かしい結果を待ち望んでいた。

清楚な 17 歳は、これまでの最良の結果を手にした場面でも驕ることなく、周りの人々への感謝の言葉を忘れることはなかった。

女子ジャンプ競技の、オリンピック種目への格上げに力を尽くした先人へも感謝を述べていた。今宵はその彼女の晴れの舞台へ、遠くから強い声援を届けるのだ。

日本時間夜半２時 30 分過ぎに始まった競技は、穏やかな天候の中で進んでいった。日の丸を背負った他の選手へも会場からは声援が上がった。これまでの実績から、最後に登場した彼女に対して、場内からは大きな「沙羅」コールが何度も起きた。用意した鳴り物も会場を興奮させるには十分だった。

２回のジヤンプの飛行距離と着地ホームの採点の合計で優劣が決まる。３位に付けた順位を２回目の競技で挽回するのだ。これまで何度も味わってきた、逆転の技を披露するのであろうと思い、画面に釘付けになった。

いつもの彼女とは何かが違う。これまで見たことがない小さな巨人の孤独を感じた。彼女がいとも簡単に歩き続けたように思えたジャンプ競技での勝利の歩みは、それは努力以外の何者でもないと痛感させられた。

すべての競技者の競技が終わった。会場からは大きな溜息が零（こぼ）れた。何と非常な結果になったのだろう。誰よりも秀でた実績を抱えて臨んだソチオリンピック。やり直しが許されないことも承知している。風が強いとか逆風だとかも、そこは問題とされない。ジャンプ台から滑走した以上、評価基準の中の数字で処理されるものなのだ。

長い重い夜半のドラマは終わった。マスコミは競技結果以上に、彼女への惜しみない賛美の言葉を用意していた。画面には、初めての悔し涙の彼女がいた。彼女には、まだ求めて止まないものがある。

JA 上川中央広報誌 H26.03 号掲載

21　ムシヤシナイ ～オレ、父親を殺すかも・・・

今年の北海道の冬は、厳寒のニュースが続いた。十勝地方陸別町では「日本で一番寒い町」を記録した。この町には第三セクターが運営する「ふるさと銀河線」の列車が走っていた。その路線名を使った題名の文庫本に出会った。この本の帯には「あなたの明日に、優しい風が吹きますように」という著者・高田郁（たかだかおる）　のコメントが添えられていた。

読めばそれは、いろいろな鉄道路線を舞台にした、さわやかな短編が散りばめられていた。その中の一編「ムシヤシナイ」は奇妙に心に残る作品だった。大阪環状線の駅のホームにある『駅蕎麦屋』は、朝晩のラッシュ時間はてんてこ舞いである。そこで夕方からの切り盛りを任された主人公も訳有りだった。息子夫婦とは絶縁状態で、駅近くのアパートでのひとり暮らしだった。ある日の『駅蕎麦屋』へ、５年振りの孫が、親には黙って訪ねて来た。中学３年生の彼は店の前を行ったり来たり。暖簾を仕舞う時間になっていた。

店を終え、２人並んでアパートへ帰った。可愛い孫のために簡単な料理を用意した。久しぶりに隣に寝る孫は、一晩中呻き声を立てた。孫は親を含めた周囲の過干渉に怯え、疲弊してしまっていた。勉強に追い立てられるような日々を送っていたのだ。心を開いた孫は、次の日の夜「オレ、親父を殺すかも知れない」と握り拳を震わせながら、祖父に心の声を発した。孫が最後の頼みの綱として、親には内緒で列車を乗り継いでやって来たのだ。

祖父は、はっとさせられた。さっきまで、「ムシヤシナイ 」の意味を教えたりしていたが、吹き飛んでしまった。「軽い食事をとって腹の虫を宥（なだ）めておく」大阪地方の言い習わしだと孫に教えた。殺伐とした孫の台詞を聞いた祖父は、夜更けの『駅蕎麦屋』に孫を誘った。賑わいが終わった駅の店の厨房に二人で並んだ。棚から包丁を取り出すと、孫に葱を切る術を教え始めた。孫の手に自分の手を添えて、「小峰握り」の握りを伝授して葱を切らした。旨く葱は切れて行く。

孫は怪我をすることなく、総てを切り終えた。暫くすると孫の強張りの表情が晴れ、少しづつ穏やかになった。親とのこれまでの経緯を喋り出した。包丁を持った孫の手をそっと包んだ。孫が勇気を持って親と対峙できると確証した。次の日孫は、晴れやかな顔で「虫養いさせてもらいに何度も来るよ」と言う言葉を残してホームに消えた。今年の冬も受験と向かい合った多くの子供たちがいた。

JA 上川中央広報誌 H26.04 号掲載

22　心通じ合う～室蘭市本町1丁目46番地

安田顕と言ってすぐに彼の顔を思い浮かべる方は、演劇などに造詣が深い人であろう。
TEAM　NACSのメンバーの一員である。「探偵はバーにいる」などの映画で主演する大泉洋も仲間である。その安田顕のエッセイには心癒された。本のタイトル「北海道室蘭市本町１丁目４６番地 」、 彼が生まれた故郷の生家の住所だが、今はこの表記はないという前置きから話しは始まった。
そこには７０歳前の彼の父親との思い出話が綴られている。同時に鉄の町として君臨した故郷室蘭の変遷も、愛情豊かに語られている。けして経済的には裕福ではなかったが、笑いで総てを吹き飛ばす、昔の家族風景がそこにはあった。安田の父の親は、秋田の農家の次男で土地も畑も、何にも当らなかった。それで外に出て、室蘭へと新天地を求めてやって来たのだった。又夕張が故郷の、安田の母親も苦労人だった。がむしゃらに生きた親達の姿を見て来た両親は、同じように必死に外へ出て働いた。しかし、どんなに疲れても、息子達への愛情は豊かだった。「番外編」で親子対談が盛り込まれているが、その中に今は懐かしい「鉄道員」の映画に触れた場面がある。秀逸な作品は、今でも多くの人の心に残っているものなのだ。それはイタリアの古びたアパートに住む、鉄道員一家の物語だった。
年頃の娘や長男と上手く行かないで、いつも怒鳴りっぱなし。労働組合にも逆らって問題を起こし、爪弾きにされて一人いる親父。
その時に主人公である息子が、その親父を連れて行く処が、昔通った居酒屋。その飲み屋に来るお客さん達だけは、何も変わらずに歌で迎えてくれる。どんなことがあっても、最後にそこへ行けば迎え入れてくれる場所があった。安田がちょくちょく暖簾をくぐる、店の店主から聞いた、追い求める居酒屋像の夢が「鉄道員」のこのシーンだったのだ。安田の父も、この映画には大きな評価をしていた。
哀愁の音楽をバックに、モノトーンの画面が崩れ壊れる家族の日常を見事に描いた作品だった。

その家族の間を取り持つ主人公の利発さが、涙を誘い当時の社会の共感を呼んだ。
日本でも映画同様、隣近所が助け合ってお節介し合って生きて来た。そのような時代が、著者安田の心に今も強く残る。「鉄道員」では、心通じ合うようになった家族の集まりの夜、静かに隣の部屋で主人公の親は永久の眠りに就く。こちらは１９５６年の伊映画である。

JA 上川中央広報誌 H26.05 号掲載

23　田野畑村の鵜の巣断崖～記録文学の旗手

平成２５年１１月に津村節子の「三陸の海」が出版された。岩手県の下閉伊郡田野畑村に導いていく作品である。このリヤス式海岸の風光明媚な村をこよなく愛する作家がいた。

平成１８年に没した吉村昭が其の作家である。津村と吉村は互いの文学の才能を尊敬し合って、若くして結婚した。その日の生活に追われる新婚生活だった。東北の各地をそして北海道の果てまで、二人して行商の旅へ出た。苦しみもがく長い月日があった。

昭和４０年第５３回芥川賞をまず、津村が受賞した。吉村も毎年候補作として名前は挙がるが、芥川賞を手にすることは無かった。しかし、昭和４１年「星への旅」で太宰治賞の栄誉を受けた。実はその作品の舞台モチーフが、田野畑村の鵜の巣断崖だったのだ。

その後作家としての光を充ててくれた田野畑村へは決まりごとのように出掛けた。ここで彼は大勢の人と出会ったが、何度もこの地方を襲った大津波の話が耳から離れなかった。

明治以降の被害の歴史、明治２９年大津波・昭和８年３月３日大津波・昭和３５年５月チリ地震津波、この東北の村々に大きな傷跡を残した歴史を、記録文学の旗手の吉村は文庫本として世に送出した。昭和４５年のことである。「海の壁」として世に出たがその後「三陸海岸大津波」と改められた。数少ない、生存されている老人から昔の大津波の話を蒐集した。そして田老町役場に保存されていた尋常小学生の作文を採り上げ、作品に緊張感をもたせた。そうして山道を登っていく大津波の恐怖を、紙面に見事に再現した。

平成２３年３月１１日この日の津村は長崎にいた。吉村が以前に書いたベストセラー「戦艦武蔵」の功績を称える会に出席していた。午後に発行された号外が、東北の惨事を大写しにして届けられた。今は故き夫・吉村が愛して止まなかった田野畑村のことを思うと、すぐにでも飛んで行きたい気持ちだった。

津村も夫の誘いで何度もその村を訪ねた。

２００メートルはある鵜の巣断崖から見下ろす田野畑村も巨大な自然の大津波に今回も遭遇した。リアス式海岸は大津波が駆け上がり易い地形だと、吉村は耳からの知識として本に書いた。陸の孤島といわれた田野畑村で訪ね聞いた、大津波の現在への警笛は粉砕された。しかし、平成１６年に新しい壮丁になった文庫本は重版され続け、その印税は吉村が愛して止まなかった田野畑村の復興に向けられている。三陸鉄道が全線再開し、復興にはまだ遠い海岸線を走る。

JA 上川中央広報誌 H26.06 号掲載

24　息子には学問を～野口英世

明治９年福島県耶麻郡三ツ和村に野口英世は生まれた。母シカの愛を受けて、世界の細菌学（黄熱病・梅毒等の研究）に大きな功績を残し昭和３年５２歳の若さで、自らも黄熱病を患いイギリス領ガーナのアクラに死した。

この世界的に評価された、研究者であり学者である野口英世の母シカの評伝に出会った。

死ぬまで働き詰めだった人生が綴られている。母シカは、６歳の時から会津磐梯山を眺めながら、子守り・野良仕事と働いた。１５歳の時には近所の人の肝いりで、女中奉公に出て祖母を守った。男手があれば楽になるだろうと言う勧めで、２０歳の時に佐代助を婿に貰った。しかし、佐代助は人当たりは良いが酒癖が悪く、嫁シカの肩の荷は軽くはならなかった。貧しい中でも、子供３人に恵まれた。子供の成長が母シカの背中を後押しし、何時寝ているのだろうかと思われる程、働いた。更に清作１歳半の時の炉端での事故からは、過酷な労働にも出掛けるようになった。

冬には峠越えもままならぬ、荷物運びの労働も懇願して請負うようになった。息子清作が、手に大火傷をしてしまったのだ。多くの伝記で綴られている通り、左手は指がくっ付いたままに治癒してしまった。母シカは自分の不注意で、清作の手を不自由なものにしてしまったことを一生背負って生きた。「耕作作業も出来ない体だ、息子には学問を」この母シカの一念を糧に、後の清作は抜きん出た学業成績を残した。手の不自由さを罵る生徒もいた。しかし、母シカの愛の導きが強い信念を植え付けた。周りの浄財で、物を掴むことが出来るまでになったその時の手術の経験は、彼を医学への道に導いた。

野口英世を語る時、彼の秀でた能力を見抜いた恩師小林栄氏、清作の手の手術執刀医渡辺鼎氏がある。更に東京で、彼へ深い援助の手を差し延べた歯科医血脇守之助である。

彼等なくして、野口英世の活躍はなかった。２２歳の医師合格から、研究者への転進が彼をより世界的に押し上げた。「まておのれ咲かで散りなば何が梅」このような俳句を残して、２５歳の英世は日本を発ちアメリカへ渡った。紆余曲折の中、数々の病原菌の発見・研究等で名声を不動のものとした。故郷会津の母シカの手を握ったのは、日本を発って１３年後であった。講演旅行にも母シカを同行させ、宴席でも傍に並んだ。大阪箕面の宴の舞では、芸子が親子の振舞いに涙したという。

裏磐梯の田舎をから、１歩も外へ出たことのない母シカに長い非礼を詫びる気持ちの旅だった。この母ありてこその思いだった。

ウッドローン墓地の英世夫妻の墓石には「英世は科学への献身により、人類のために生き、人類のために死んだ」と刻まれている。

平成の今英世は誕生せず、福島の海の沿岸の町を避難した人々の、還る日は遠い。

JA 上川中央広報誌 H26.07 号掲載

25　日中の海を越えた愛～恵恵の乳癌

恵恵（フィーフィー）は中国北京の西山金山陵園に眠る。夫である日本人健太の愛情に包まれて、２０１１年６月３３歳の若さで永遠の眠りについた。「日中の海を越えた愛」の副題が付けられた「恵恵」が６月に出版された。中国で先行出版していた「我在天国祝福你」の国内での反響が大きく、追いかけるように母親付楠（フナン）・健太の共著として日本でも出版されたのである。関西の大学で出会った二人の人生観の違い、又その二人の親達の国際結婚への心の葛藤、そして何よりも、辿り着いた結婚を３ヶ月後に控えて見つかった乳癌との、壮絶な闘いが綴られて行く。

母付楠と夫健太は、恵恵への限りない細やかな愛情をそれぞれ語った。一人っ子の健太は、中国での結婚生活を選択したが、親へ相談を持ち掛けての妥協点は、年に何回か日本へ帰国することであった。日本で、恵恵からの検査報告の連絡を受け取ると健太は、神業としか言い様のない最短ルートで北京の町の人になっていた。中国へ渡るにあたっては、教職生活も畳む決心が出来ていた。

健太は中国での手術に立ち会った。健太は未知の治療用語などに戸惑い、日本に住む医師の友人と連絡をとった。聞けば聞くほど恐怖と不安な気持ちが浮かんで来た。恵恵の乳癌は脇の下のリンパ節へも転移が見られた。

抗癌剤による化学治療の方針が下った。６クールまでの抗癌剤の投与が予定された。ホルモン治療も加えられていた。２ヵ月後に迫っていた日本での結婚式は延期された。抗癌剤の抗癌作用は、成長している細胞を優先して攻撃するところにある。その副作用は並大抵ではない。投与薬剤と患者との相性などを織込んでいても、嘔吐・脱毛・骨や皮膚の痛みなどに苦しめられた。６クールまでの抗癌剤の投与が終わり、最後の放射線治療も終わり恵恵の手術は成功した。体力の回復した恵恵は日本語教師になり、健太は友人と現地で、雲飛象カレー店の共同経営を始めた。

事業も軌道に乗って、２年遅れの結婚式が華やかに日本で開かれた。如何に待った慶事であったか宴の様子が浮かんで来る様な手記が用意されている。がしかし、２００９年１月の再検査で示されたのは「肝臓左右２葉多発性癌転移」「鎖骨上下リンパに転移」だった。７・８クールの抗癌剤投与が唯一恵恵に残された道だった。当時の家族を含めた苦悩が綴られている。しかし恵恵は入院先の病院では患者達の希望の星だった。自分より遥かに苦境に立たされた女性達に、親身で相談に答えた。一進一退の自分の症状も省みないで、笑顔で答えた。反日暴動の波・北京上海での反日デモ・尖閣列島をめぐる衝突に揺れる７年間であったが、恵恵家族の存在が健太に、穏やかな北京生活を可能にしていた。

最後の拠り所の漢方薬も服用したが、恵恵は「これでいい。すべての問題は解決したわ！ここからの道は平坦だから」この言葉を家族と交わした最後として生命果てた。２０００年代に入って乳癌発症率が高いアメリカに於いて、ピンクリボン運動が生まれた。

愛する人のための早期受診・早期発見を謳っている。

JA 上川中央広報誌 H26.08 号掲載

26　死ぬ前にもう一度、娘に会いたい

～めぐみちゃん

暑い夏は終わりなのか、幾分凌ぎ易くなったお盆明けの朝、朝刊の社会面に昨日読んだ本の著者「横田早紀江」の写真が目に留まった。「めぐみと私の３５年」の題名から分かるように、海の彼方の半島の北の国で元気であろう愛娘の思い出と、今の著者の心を綴った単行本である。副題には「死ぬ前にもう一度、娘に会いたい 。」
帯の半分には「私に残された時間は、もう短い 。」 と親の思いが添えられている。横田家には、娘の１３歳での失跡までは、ごく普通の家庭生活があった。娘がいつもの時間に戻って来ない。用事が出来たのだと判断する。

時間が経過する。仲間に電話する。不安が交差する。良からぬ結果を思う。１日が過ぎ２日が過ぎる。海辺の町全域で捜索が始まった。手掛かりのない毎日が過ぎて行く。生きる力が萎えて行った。６年後、夫に東京への転勤命令が下る。失踪した娘の部屋は、そのままにして置きたかった。娘との繋がりが消える想いだった。

手掛かりを求め歩いた、新潟の海辺の町並みが、遥か遠くになる想いがした。娘が失踪した時の著者は４１歳、片時も忘れない娘の安否は分からない。２０年の月日が流れた。国内の小さな町の事故だと想い描いていることが覆った。夫婦に、対岸の半島の北の国のニュースが届けられた。その国を脱出した人の話が、夫妻に伝えられたのだ。

闇夜の子船の船底に押込まれ、自由を奪われ「めぐみちゃん」は、海を渡った半島の北の国に拉致されていたのだ。うれしい知らせの反面、個人の行動ではどうにもならない出来事だった。その日のニュースは全国に駆け抜け、間もなく横田夫妻は、署名運動の先頭に立つ立場におかれた。退職した身のご主人と、純粋に娘の身を案ずる母は、先頭に立って大衆の前で訴えた。子を思う親達の切なる愛情が、この国を動かした。

海を隔てた半島の北の国から、第１陣・第２陣の帰国者が、闇の時間を超えて故郷の土を踏んだ。しかし、その中には愛しい娘の姿はなかった。著者の家族に死亡のニュースが流れた。娘の現地での結婚、孫の存在が伝わった。２０年前の娘の失踪後からは、京都の下町育ちの穏やかな性格だけでは、到底乗越えて行けるものではなかった。

数多くの風評を受けながらも、わが娘を抱き止めることを信念に、夫婦で戦って来た。
真摯な再調査が、かの北の国で今続けられている。刊行された単行本の表紙と、作品の中程には、著者の娘「めぐみちゃん」の１３歳までの写真が掲載されている。一面の黄金色に色付く稲穂が風に靡く。彼女は故郷の、実りの秋の景色を忘れずに抱いているだろう。

JA 上川中央広報誌 H26.09 号掲載

27　四島の架け橋～納沙布岬

根室まで…　丸瀬布出口から高規格道路を降りると、根室までは一般道をひたすら走る。

今年も豊作モードの水田風景から、玉葱作付けが広がる畑作地帯を抜けて行く。晴天の美幌峠には、滅多にお眼にかからないものだ。どんよりとした雲が、低く立ち込めた午後だった。峠の坂道を下り切ると、そこからは左右に大きな牧場が広がる酪農地帯だ。弟子屈町から標茶町虹別そして上西春別へと走る国道は別名パイロット国道の名前がつく。戦後に開墾された、パイロットファーム「実験農場」地帯を抜けることに由来する。

そこで交差する中標津空港へ抜ける道は、ミルクロードと名付けられている。あっちこっちで放牧された乳牛が草を食む。更に走ると、まもなく別海だ。給餌用に刈り取り巻かれた牧草ロールが、行儀良く並んでいる。

酪農地帯に入って「牛横断注意」の看板が眼に飛び込んで来る。エンジェルマークの付いた煙突がチーズ工場だと教えてくれる。短い街中を過ぎると、行き交う車両は少ない。

根釧台地を走り厚床を過ぎると、広大な風蓮湖が飛び込んで来る。アクセルを踏んでいた足を少し休ませた。冬場には丹頂の飛来があり、バードウォッチャーには人気だ。

湖畔を抜けると、根室湾を左に見て根釧国道を走るだけだ。７月中旬の宵、潮風が涼を呼び根室の町が心地良い。翌朝早く、根室の町から半島突端の納沙布岬を目指した。

友知（トモシリ）を通り、小高い丘に鎮座する歯舞神社を仰ぎ太平洋の波音を聞く。間もなく納沙布岬に辿り着く。実に遠い道程だった。四島の架け橋のシンボルアーチと中央の灯火台が、遠く霞む島影を望む。琿瑤瑁（ごようまい）水道・野付水道を挟んで６０有余年前の歴史の傷が偲ばれ悔やまれる。

此処まで来たら、霧多布湿原が良い。釧路と結ぶ国道をしばらく走る。ここも酪農地帯を抜けて行く。車は初田牛の信号から浜中町へと入って行く。太平洋の潮風を受ける樹木は、地を這うような高さだ。海辺に沿って走ると霧多布湿原だ。３２００ｈａの湿原の保全と自然保護運動が展開されている。その規模広大さは２２０００ｈａの釧路湿原には、遠く及ばない。しかし、春から夏の白いワタスゲ群落や黄金色のエゾカンゾウ・紫色のノハナショウブ群落などを、仲の浜木道を歩きながら眺められる。７月中旬の今は、丁度ノハナショウブの紫盛りである。夏の道東のさわやかさを堪能した小旅行だった。

JA 上川中央広報誌 H26.10 号掲載

28　この町に祭りを～28年の歳月

「どろつくどん」より掲載

１０月の中旬になると故郷の町でお祭りが繰り広げられる。神社などに仕舞われている昔ながらの山車を、地域の皆で組立てて町を練り歩くのである。車輪は松やクスの硬い材質で出来ている。山車の上には、地区のお囃子と踊り手が乗り込む。行灯やダンダラ幕で山車を飾り付ける。最上部には鯉の滝登りなどをあしらった御神体を祀る。町を練り歩きながら、山車は商店の軒先に頭を向ける。

お囃子に合わせて、お多福やら猿や鬼のお面を被って踊りを奉納するのである。文政９年（１８２６年）、時の藩の当主によって神社が造営された。その１年前の文政８年、新宮造営のドウズキ（基礎工事）の際、町人らは自発的に無償奉仕で労役に従事し協力した。女衆は三味線や太鼓を打ち鳴らし、労役者を労い、興を添えた。この時、問屋街の一角の商人達だけが加わらず、周りから悪評を買ってしまった。頭を痛めたこの商人達は汚名返上と、二人の若者を江戸へ送り込んだ。

二人は江戸の神田囃子を習い、京都祇園の山鉾を参考に現在のような山笠の形を考案したと言い伝えられている。密かに練習し、迎えた文久９年その神社の御遷座祭、囃子山車「どろつくどん」を率いて一番に参詣し見事汚名を返上したと言う。同時に大きな喝采を浴び好評だったようである。明治初期の絵巻物には、数多くの山車の描写があり、それも時の流れとともに山車は減っていった。

このような歴史は知らなかったが、山車の引き手からこの祭りに親しんで育った。中学に入ると踊り手に推された。代々と受け継がれた年季物の衣装箱には、お面と豪華な装束と頭を包む手拭いが納められていた。

夕飯を終え、小さな神社に出かけ舞の手解きを受けた。猿は猿らしく、お多福は女性らしく、鬼は鋭角的に動いて厳しさを表した。１ヵ月半程の練習で本番である。３日間の祭りの時は学校を昼に終え、息を切らして山車の所まで走った。当時はそのことが義務のように思えた。江戸から続く祭りを絶やすまいなどと、思い上がった気持ちはなかった。

福岡南部のお祭りである。この頃の思い出を、酔いの席で話したことがある。それと時を同じくして、この町に祭りをと言う旨の会が開かれた。大勢の若者の気持ちのマグマが噴出して来た。

その後は夜毎の会合が続き白熱した。

ぼんやりとした映像のように、祭りの輪郭が見え出した。雪の季節の会合から、秋の開催へと動き出した。準備に追われる毎日だった。大雪山を背にあのキャラクターが、稲穂に揺れる秋を泳ぐポスターが届けられた。澄み渡った秋空のもと、初めての祭りが繰り広げられた。それから２８年の歳月が流れた。

今年も１日だけの賑わいの余韻とともに、祭りの後の秋の風、祭りの道具は再び眠りに付いた。

JA 上川中央広報誌 H26.11 号掲載

29　大家の知恵は夢～落語人情話「芝浜」

12 月になると高座に掛かる回数が跳ね上がる演目がある。落語人情話「芝浜」である。師走の江戸の魚屋夫婦の話である。

大酒飲みの勝五郎が，女房に尻を叩かれ夜もまだ明け切れない芝の浜辺の，魚河岸に出かける。ぼんやり煙草を一服吸って、波打ち際で顔を洗っていると，手に何かが触った。ボロボロの財布である。指で中を探ると確かに金である。二分金で四十二両、現在の貨幣価値なら百万円～三百万円か。こんなことがあると，十日ぶりに魚河岸に来たことなども忘れ果て、当分は遊んで暮らせると有頂天だ。

家に帰ると女房に酒を買いに行かせて，そのまま酔い潰れて寝込んでしまう。気持ちよく寝ていると，不意に女房に起こされて魚河岸へ出掛けるように急かされる。歳を越せないと怒り出す。勝五郎は「四十二両の大金がある」と女房に鼻息を荒げて捲くし立てる。

勝五郎が家に持って帰って来たボロ財布の大金。困り果てた女房は、長屋の大家に相談を持ち掛けていたのだ。拾ったお金に手を付けて発覚でもしたら，奉行の咎めで身を潰す、大家の知恵は「夢」にあった。ボロ財布を拾ったのも夢、大金を見たのも夢、寝起きの勝五郎に女房からの重いことば。挙句の果てに夢とも知らず，友達を呼んでドンチャン騒ぎしたことだけが真実だと言われれば、自分自身が腹立たしくもなった。

暫く頭を抱えて考え込んでいた勝五郎，この日を境に酒を絶ち，仕事に精を出すことを女房に誓うのだった。それから三年、離れていた得意先も戻って来て，少しの蓄えも出来て小さな店を構えるまでになった。

大晦日の夜、片付けも済ませて夫婦水入らず、女房が見せたいものがあるという。出されたのは，あのボロ財布そして四十二両。奉行に届けて落とし主不明として，とうにお下がりになっていたものである。女房は嘘を通したことを詫びる。

勝五郎の手の握り拳が女房に降りかかる。

なぜに感謝こそすれ殴ったり出来よう。会場のあちこちで，目頭を拭う姿が見られる場面である。技量の備わった演者に掛かれば、瞼の奥に、火鉢を囲んだ二人と大晦日の夜の雪の情景が浮かんで来るものである。

この場で，女房は勝五郎に酒を勧める。しかし。最後の台詞は機会があったら，御自身でお愉しみを。一年を振り返るには打って付けの演題である。

JA 上川中央広報誌 H26.12 号掲載

30　３頭の牛の入学式～夢は牛のお医者さん

古い映画館である。すでにその灯を消して何年にもなる。旭川市内の旧国劇は、今定期的に市民グループによる映画上映が催される。

暮れの１２月「夢は牛のお医者さん」の上映会に出掛けた。レトロな雰囲気が至る所に伺え、それだけで幸福感を感じた。しかし、こんな地味な映画に観客は足を運ぶのだろうかと思っていた。会場に入ると異様な熱気があり、満員状態だった。新潟県の山間部松代町莇平（アザミヒラ）小学校が舞台である。

昭和６２年新入生児童のいない年だった。校長の発案で３頭の牛の入学式が行われた。

児童達が責任を持って育て、体重が４００キロになったら卒業する条件であった。スクリーンでは牛の入学式の模様に始まり、２６年間に及ぶ記録が、誇張することもなく飾ることもなく映し出された。山里の長閑さと優しさと、そして冬の厳しい現実が伝わって来た。

莇平小学校で牛の入学式と卒業式を体験した児童のひとりが、大きな夢を擁いた。
牛の世話に明け暮れ、牛の卒業式で泣き崩れた児童は、獣医を将来の夢とした。夢を育んでくれた莇平小学校は、平成４年に廃校となった。しかし、夢を追い求める彼女は、親元を離れて高校生活を送った。その当時の映像もスクリーンにあった。井の中の蛙であることを思い知らされた。成績のレベルが夢の実現とかけ離れていることが分かった。下宿の部屋が映し出される。テレビはない。勉強をする机代わりの炬燵だけである。夢の実現に向けてテレビは無縁のものとした。

高校生活の終盤では、眼を見張るような成績を修める様になっていた。夢は１度と決めていた。岩手大学農学部獣医学科、狭き門であった。父が娘を心配して、受験の日に大学まで送って来たことが映し出される。筋書きのないドラマを映画監督は追い続けた。帰省していた自宅に合格の手紙が届いた。

牛の背中を追い続けた小学生の児童は、夢の入り口に辿り着き成人式を故郷で迎えた。
当時の仲間も自分達の道を、しっかりと歩いていた。獣医学科は６年制である。セミナーと実地で、現場での技量を習得する。獣医の国家試験を受験する彼女がいる。

莇平地区で飛び跳ねていた児童は、最後の関門に立つ凛凛しい女性になっていた。１度の挑戦でその壁も越えた。愛する祖母が贈ってくれた愛車で、故郷の畜産農家の牛たちを見守る彼女がいる。２人の子供を保育園に送る姿も映し出される。２６年間に及ぶ爽やかな、夢を求めた児童の物語である。松代町は新潟の指折りの豪雪地帯である。

JA 上川中央広報誌 H27.01 号掲載

31　あなたに褒められたくて～高倉健

「あなたに褒められたくて」（高倉健著）を読んだ。銀幕のスターから、名優と呼ばれる域まで駆け上がって逝った彼の文庫本である。

北海道を舞台とした作品が多かったことと寡黙な耐える役が際立っていたことが、大勢のファンを引寄せた。文庫本には香り高い思い出話が織込まれている。小田宅子（いえこ）という彼から５代前の先祖が残した日記がある。「東路日記」という表題で天保１２年、九州から長野善光寺そして江戸までの彼女の旅日記である。そのことを知らず、彼は３７年間２月３日の節分会に欠かさず、善光寺参りをしていたと言う。

後に丁重な学者からの手紙で、この作者を教えてもらったことに非常に感激したことを綴っている。自分に流れる血を意識したと結んでいる。また彼は演じるということを問われて、「気」と応えることが多かった。

映画の出来上がりの質の問いでも、同じような表現を使っている。撮影現場の雰囲気でも「気」という言葉を使う。長野県上田市の刀匠、宮入子左衛門行平との出合いを綴っている。そこに彼の応えはあった。刀匠の彼はまだ若かった。刀を打つ刀匠としての心意気を尋ねた。刀匠は仕事場に座っていることが好きだと言った。刀を打つ行為が好きだとも言う。又刀を打っていることに感謝していると話を続ける。そして亡くなった父や祖父、自分に仕事を与えてくれる職人さん、作品を受け入れてくれるコレクターの方達、もっと言えば世の中全部の人に感謝して祈りを込めて刀を打つ。このような話を高倉は聞いたのだ。刀を打つ動きを見ると、肩や腕に余分な力が入っていないことに驚いた。

高倉健の演技論が綴られているようにも思われる。他にも多くの出合いの思い出を優しい筆遣いで何編も紹介している。しかし、彼は文庫本の表題にした母を、一番語りたかったのだろう。明治生まれの元教師であった母親が、本から抜け出さんばかりに生き生きと描かれている。純粋に他の誰でもないその母親に、褒められようとの想いで駆け上がって来たとある。その愛しい母親の告別式へは、父の時と同じように出席しなかった。撮影に穴が開くという理由で。告別式に出席しなかったことが、どれだけ悲しいものだったかを綴っている。海の見える家を用意したが、昔気質な母は一度もそこを訪ねることがなかった。

むしろ彼の真骨頂の雪のシーンなどを、体を案じて止めるよう諭した母親がいた。最後に彼、高倉健は何故寒さ厳しい中での撮影に耐えて来たのか、今は亡き母に綴っている。

「お母さん、僕はあなたに褒められたくてただそれだけで、あなたが嫌っていた背中に刺青を描いて・・・・・・・三十数年駆け続けて来れました」と少年の日に帰って甘える口調で結んでいる。この「あなたに褒められたくて」は第１３回日本文芸大賞エッセイ賞に輝いている。

JA 上川中央広報誌 H27.02 号掲載

32　攻めのもてなし～敏腕コンシェルジュ

このコラムも３２回の掲載となった。農業関連の話題も少しとは思っていたが、大きくぶれて終には高倉健の文庫本までに話題は及んだ。しかし、左程必要はないにしても知って納得する事象があることを綴ったつもりである。原稿用紙も三枚弱まで拡大していった。

最後に登場するのは凄腕のコンシェルジュである。「プロフェッショナル仕事の流儀」の番組で紹介された彼女は、超高級ホテルの接客担当である。初めて来日した顧客に、流暢な英語を駆使して最高の満足感を与える、それが彼女の本領である。

去年日本を訪れた外国人観光客は過去最高の１、３４１万人である。その数は今後さらに増える傾向にある。２０２０年には東京オリンピック開催。外国人観光客への単なる道案内ではない。何を楽しみに来日したのかを旨く汲み上げ、誘導し手助けをする。表情の変化を見て取り、心を読み解いて行く。コンシェルジュの仕事の醍醐味は「どれだけ相手に近付けるか」であるという。「富士山へ登りたい」「花火が見えるすし屋を紹介して欲しい」叶えられる依頼もあれば、断りの結果もある。それが顧客へどのように伝わるのか。もっと的確な提案はなかったか。無難な対応になっていないか。

彼女が求めるのは「攻めのもてなし 」。 やるべきことだけではなく、やった方がいいことは全部やる。この攻めの姿勢こそが、接客のプロの仕事だと彼女は考える。一流コンシェルジュのみが入会出来る世界組織「レ・クレドール」で、現役にして名誉会員に認定されているただ一人の日本人である。

このテレビ番組の前身は「プロジェクトＸ」だった。その主題歌は今でも心揺さぶられる『地上の星』だった。凄腕コンシェルジュの彼女などが正しく「地上の星」のイメージなのだろう。２月初めに夫婦で映画館に出掛けた。『中島みゆき、縁会』彼女の公演をカメラが追い続けた素晴らしい映画と出会った。

客への語り掛けはラストのみで、歌い手の力量と演奏者の躍動感が、激しい振動とともに伝わって来た。ステージの最前列で楽しむ雰囲気だった。料金も特別料金制だった。白髪揃い６０歳を超えた観客が目立った。「地上の星」が流れると何故か涙が流れた。スクリーンいっぱいに熱唱する彼女がいた。今、私達は同じように極めるまで走っているだろうか。同じように達成感を感じて、流れる汗をかいただろうか。そんな想いが込み上げて来た。　　了

※ご愛読ありがとうございました。

JA 上川中央広報誌 H27.03 号掲載

執 筆　　野 口　　昇

（ Ｊ Ａ 上 川 中 央 専 務 ）

―編集後記―

農協広報誌を通じて、農協ファンが少しでも増えればとの期待から、筆者にお願いして始まったコラム（すろーライフ）・・・

２年８ヶ月におよぶ壮大な執筆作業も３２回で幕を閉じる事となりました。

すろーライフ・・・『しなやか』で『温かな』コラムが皆様の生活のひと時を幸せにする事を願っています。

始まりがあれば終わりあり・・・寂しさを感じながらも、コラムの中から頂いた筆者の思いに感謝し、笑顔で新たな始まりを・・・

上川中央農業協同組合

制作　平成 27 年 3 月 31 日
編集　営　農　振　興　課